

### \* 65cm 屈折望遠鏡 2 代目撮像装置発見と復元

アーカイブ室新聞 68 号で 65cm 屈折望遠鏡の撮像装置（写真取り枠）などを天文台プレミュージアムに持ち込んだニュースを書いた。そのとき持ち込んだ撮像装置（写真 1）はツアイス製のオリジナルで重厚なものであった。今になってよく見るとこの撮像装置にはダブルスライドの送りねじが欠損している。どこかに転用されたのであろう。写真 2 は撮像装置についている名盤である。そして 69 号で 65cm 屈折望遠鏡の観測装置である、分光器、撮像装置、掩蔽観測用接眼部の 3 点セットが揃ったと書いた。



写真 1 ツアイス製の 65cm 屈折望遠鏡用撮像装置



写真 2 ツアイスの名盤

65cm 屈折望遠鏡を最後まで使って土星の衛星を観測し軌道改良を行っていた畑中至純氏が使っていた撮像装置は、三鷹光器が制作した 2 代目のものであった。しかし、その 2 代目の撮像装置の行方は懸命の捜索にも拘らず知れなかった。現在は歴史館になっている 65cm 屈折望遠鏡ドーム（大赤道儀室）は 2000 年に歴史館に改装される際、床下などに保管されていたものは全て外に出されてしまった。初代のツアイス製のものは旧図書館の可動書架の中にあっただが、2 代目の三鷹光器製の撮像装置はどこを捜しても見つからなかった。ある時、65cm 屈折望遠鏡観測床の階段下の物置を漁っていた所、何か分からないがフレーム状のものを何枚かと、ダブルスライドになっているフレームが乱雑に放り込まれた段ボール箱を見つけ、それらをまとめて自分の部屋に持ち帰った。段ボール箱を抱えて部屋に向かう途中、バードウォッチングの途中の畑中氏に出会ってそれらを見せたら、「これですよ、私が使っていたカメラの一部です！」と言うのである。それらを部屋の机の上でとっかえひっかえ重ね合わせたり並べ替えたりしている内に、どうやら撮像装置のよう

な形に並べる事ができた。この段階でたまたま部屋に尋ねてきた畑中氏に見せたところ、これこそ三鷹光器製の撮像装置だというのである。ところが、そのときには望遠鏡に取り付ける基盤がなかった。65cm の鏡筒に取り付けるだるま穴のあるベース板があったはずだという。そこでまた 65cm 屈折望遠鏡ドームに探索に戻った。現在の皇太子が幼かった頃、65cm 屈折望遠鏡を覗きに来た際、製作された手すり付きの脚立の幼い子どもが立てるように作られた場所に置かれていたすりガラス製の焦点面をアイピースで覗く接眼部（写真3）の基盤が三鷹光器製の撮像装置のペンキの色と同じなのでこの基盤が撮像装置のものだったに違いないと部屋に持ち帰った。この接眼部は元天文台職員であった大橋満氏が製作したそうだが、何のためだったか、どのように使われたかは分からない。通常、望遠鏡の接眼レンズは、対物レンズの実像を見るので焦点面にはすりガラスなどは置かれぬ。この接眼部は何の説明もなく、脚立の上に置かれていたが、そこには不思議な事に初代の 65cm 屈折望遠鏡用のツアイスの撮像装置の写真が置かれていた。

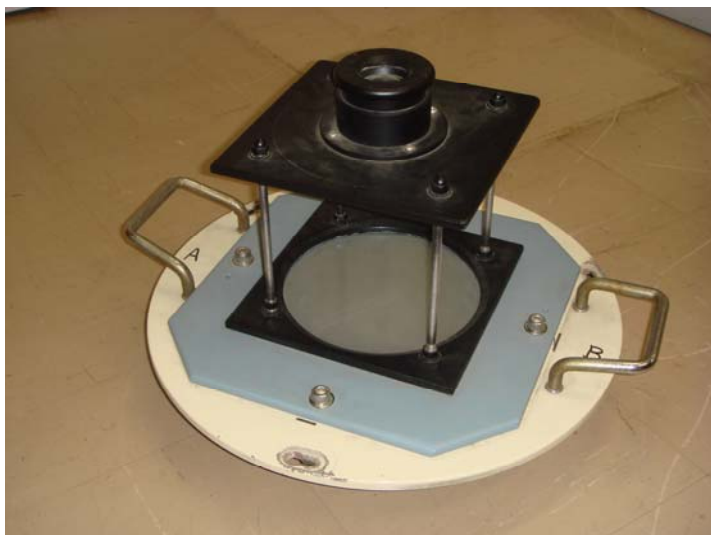


写真3 65cm用に作られたと思われる接眼部

この基盤に三鷹光器製の撮像装置の部品を重ねて行ってほぼ組み上がったと思ったが、シャッターの暗幕が移動する空間が露出してしまふのである。そこでこの空間に入るフレーム 1 個が行方不明と思い、また段ボール箱を漁りに行ったがどこにもそれらしいものはない。どこかに転用されたと思いあきらめかけていた。しかし、シャッター部の構造と基盤の切れ込みなどをよく眺めるとシャッター部が裏返しである事に気がついた。そこでシャッター部を裏返しにすると基盤にすっぽり納まるではないか。これでほぼ復元できたと喜び、組み上げるために工場に運び、ネジ類の提供を受け工場の西野さんの助けを受けながらネジ止めを進めていくうちに、ネジと暗幕が干渉するのでシャッターの暗幕の位置がおかしいことに気がついた。暗幕を引くひも状の部分がネジと干渉するのである。暗幕が移動する位置がレールに相当するのフレームの上下逆で、シャッターの暗幕はカメラ部の望遠鏡側を通ることに気がついた。シャッターの暗幕が移動する場所を変えるとこれらの不具合が全て解決した。うまく納まったシャッター部が写真4である。そして組みあがった

ものが写真5である。

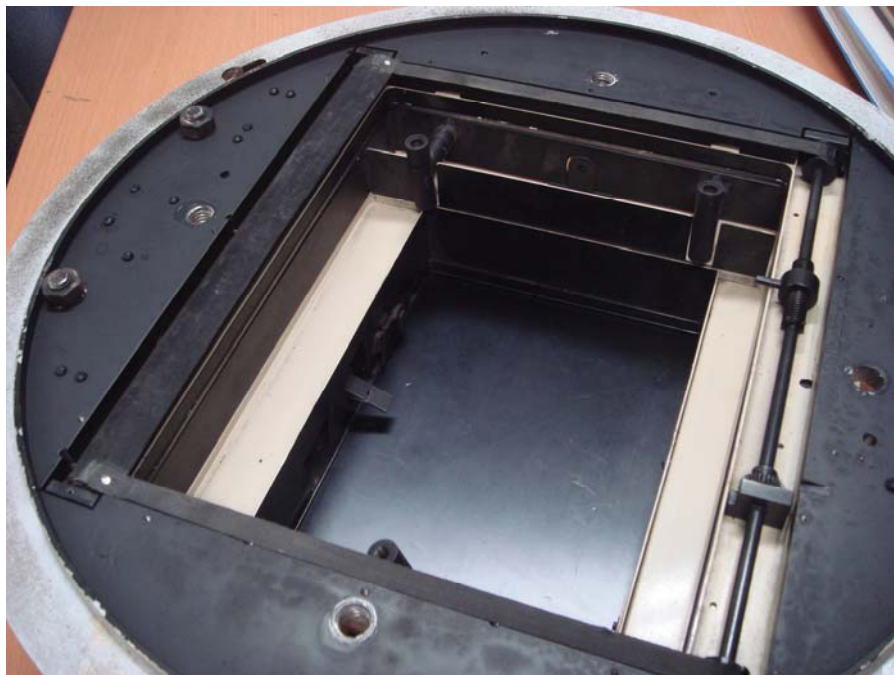


写真4 うまく納まったシャッター部



写真5 復元された 65cm 屈折望遠鏡用 2 代目カメラ

この三鷹光器製のカメラには、いろいろな工夫が凝らされている。土星の衛星を観測するために、土星本体を隠すオッカルティングマスクが入るようになっているとか、視野を照明する工夫が 3 箇所にあるとか、写真乾板がマグネットで固定されるようになっているなどである。だが、しかし残念なことに写真乾板がこの世から消えうせた現在、これ以上追及するのはやめよう。